

総統とわたし

——アジアの哲人 李登輝の一番近くにいた日本人秘書の8年間

李登輝氏の元日本人秘書：早川友久氏講演録

はじめに——「李登輝先生のそばにいた日本人」として

皆さん、こんにちは。今日は「李登輝総統とわたし」というテーマで、私が台湾で過ごした8年間、李登輝先生の秘書としてお仕えした日々をお話しさせていただきます。

私は2011年から2020年まで、李登輝先生の日本人秘書を務めました。台湾の元総統でありながら、哲学者としての顔を持ち、常に「人間とは何か」「国家とは何か」を問い続けた李登輝先生。そのそばで学んだこと、見聞きしたことを、今日は皆さんと共有したいと思います。

台湾との出会い——「台湾にハマる」まで

私は栃木県足利市で生まれ育ちました。台湾と何か縁があったということもありません。そんな私が最初に台湾に行ったのは2002年9月。大学4年生。学生として最後の夏休みに、友人と2人で旅行することになりました。別に台湾に行きたくて行ったわけではなく、そのとき人気の東南アジアよりチケットが取りやすかったのです。

私と友人は九份や淡水などを巡ったあと、金も乏しいので行った先が無料で観覧できる「総統府」。日本語が我々より上手な「おばあちゃん」がガイドに就いてくれました。20数年前の台湾では、いわゆる日本語族のおじいちゃん・おばあちゃんがまだまだ元気でした。

ボランティアガイドのおばあちゃんが言うには、「日本のおかげで台湾は発展した」と。戦後教育で育った私はびっくり。その夜はおばあちゃんの誘いで食事をごちそうになり、そのあと、台北市長選挙の民進党の李應元候補の演説会場に連れて行ってもらいました。そこで金美齡先生にも出遭いました。熱気あふれる演説会場に日本と違って若い人が多いことに私は感動しました。今思えば、その瞬間に私は台湾にハマったのかな、という感じがします。

台湾への留学——「李登輝先生の秘書になる」まで

帰国しても台湾の熱さめやらぬ私は、日台の密接な関係を知ったことなど旅行の思い出を綴り、金美齡先生に手紙を出しました。それがご縁で2003年の春から07年まで金先生の秘書を務めました。そのあと中国語の上達などを目指して台湾へ留学することにしました。台湾で暮らすようになると、当時李登輝総統の秘書だった日本人女性と知り合い、これが縁で、2007年、08年、09年与李登輝先生の日本訪問にスタッフとしてお伴しました。01年、04年にも先生は日本を訪れましたが、そのビザ発給には日本政府からいろいろと条件がありました。しかし05年の愛知万博以降、台湾人はノービザとなって、先生は3年連続で訪日することができました。

その後、台湾大学があと半年で卒業というころ、李登輝事務所の所長から、卒業したら女性秘書の後任として秘書になってほしいという話がありました。これもご縁だと思って、その場で了承しました。そして李登輝さんの執務室へと連れて行かれると、189cmある李登輝さんが立ち上がって私に握手を求めてきました。グローブみたいな大きくて温かい手。

「よろしく頼むよ」

風なんか吹いてないのに、風が吹いてくるかのような威圧感がありました。

こうして、私の秘書生活が始まることになったのです。

「台湾の父」と呼ばれた男の素顔

李登輝先生は、台湾初の民主的に選ばれた総統であり、台湾の民主化を推し進めた立役者です。しかし、私が出会った李登輝先生は、政治家というよりも「哲人」でした。その日々の生活は以下のようなものでした。

- ・朝は必ず5時に起き、新聞を読み、日記をつける。
- ・毎日欠かさず読書。特に哲学書や歴史書を好まれた。
- ・「政治とは人間学である」と繰り返し語っていた。

先生は、政治を「人間の営み」として捉えていました。だからこそ、どんなに忙しくても、部下や秘書との対話を大切にし、私のような若輩者の意見にも真剣に耳を傾けてくださいました。

「日本人であること」を問われた日々

李登輝先生は京都帝国大学で学び、戦時中は日本陸軍に志願兵として入隊した経験を持ちます。日本語は完璧で、時に私よりも語彙が豊富でした。

ある日、先生にこう聞かれました。

「早川君、日本人とは何かね？」

私は答えに詰まりました。すると先生は静かにこう言いました。

「日本人とは、義を重んじ、恥を知る民族だよ」

この言葉は、私の心に深く刻まれました。李登輝先生にとって、日本は「心のふるさと」であり、同時に「厳しく見つめる対象」でもあったのです。

「台湾人として生きる」ことの意味

李登輝先生は、台湾人としてのアイデンティティを非常に大切にしていました。ある時、先生はこう語りました。

「私は日本人として育ち、中国人として教育され、台湾人として生きてきた」

この複雑なアイデンティティの中で、先生は「台湾人とは何か」を問い続けました。そしてその答えを、台湾の民主化という形で示したのです。

- ・1996年、台湾初の総統直接選挙を実現。
- ・「中華民国は台湾である」と明言。
- ・中国の圧力に屈せず、台湾の主体性を貫いた。

李登輝の「哲学」とは何だったのか

李登輝先生の政治思想の根底には、常に「哲学」がありました。特に影響を受けたのが、ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーです。

- ・「存在とは何か」を問う姿勢。
- ・「死を意識することで、初めて人は生を真剣に生きられる」という思想。
- ・「自己を確立することが、国家を確立することにつながる」という信念。

先生は、政治を「哲学の実践」として捉えていました。だからこそ、台湾の民主化は単なる制度改革ではなく、「人間の尊厳を取り戻す闘い」だったのです。

李登輝と日本——「心のふるさと」への想い

李登輝先生は、日本に対して特別な想いを抱いていました。戦後、日本が台湾を去った後も、先生の中には「日本精神」が生き続けていたのです。

- ・「武士道」「義理」「恥の文化」への深い共感。
- ・日本の明治維新をモデルにした台湾の近代化構想。
- ・日本の若者への熱いメッセージ：「もっと歴史を学びなさい」

ある時、先生は私にこう言いました。

「日本は、もっと自信を持たなければならない。自分たちの歴史と文化に誇りを持てる国でなければ、アジアのリーダーにはなれない」

台湾の未来を託す若者たちへ

李登輝先生は、常に「次の世代」に希望を託していました。講演の中でも、先生が若者に向けて語った言葉が紹介されました。

「台湾の未来は、君たちの手にかかっている。自由と民主主義は、与えられるものではなく、守り育てるものだ」

この言葉は、台湾だけでなく、日本の若者にも向けられたメッセージだと私は感じました。

李登輝が遺したもの——「人間としての生き方」

私が李登輝先生から学んだことは、政治の技術ではなく、「人としてどう生きるか」ということでした。

- ・自分の頭で考えること。
- ・他人の痛みに共感すること。
- ・歴史を学び、未来を見据えること。

先生は、いつも「自分の人生をどう生きるか」を問いかけてきました。そしてその問いは、今も私の中で生き続けています。

おわりに——「李登輝という奇跡」

李登輝先生と過ごした8年間は、私にとってかけがえのない時間でした。先生は、台湾という国の未来を切り拓いただけでなく、一人の人間として、私に「生き方」を教えてくださいました。

講演の最後に、私はこう締めくくりたいと思います。

台湾に関心を持つ皆さんにこそ、李登輝という人物の生き様を知っていただきたい。そして、台湾という国が歩んできた道のりに、少しでも思いを馳せていただけたら幸いです。

文責：日台稲門会